九　小金井時代

小金井の家

山鹿は上海労働大学からの帰路、京都に途中下車して点林堂に立ち寄った。かねて兄嫁からその後の経営が思わしくないという相談の手紙がきていて、放っておけなかったからである。

話を聞いてみると、経営は思いのほか悪化して、整理の必要が切迫していた。長兄が死んだ頃は点林堂の最盛期であったが、その後を継いだ山鹿は入獄し、さらに出獄しても半年たつかたたぬうちに無断出奔して店を放り出していた。その間、番頭がほとんど実務を担当していたが、その番頭がいつの間にか使いこみをしたりして、もうどうにも挽回できない有様となっていた。そこで兄嫁と相談の上、合資会社を解散することにした。設備や得意先など一切を、今やっている実務者小沢と伊東に売却して負債にあて、残りは男の兄弟で分配するということになった。

――残務整理の結果、私の取り分は二五〇〇円であった。ただし私は危険人物で、何時どうなるかわからないので後顧のため必ず家と土地を買うという条件がついた。私もそれで納得した。当

時、土地は捜さなくても幾らでも新聞に出ていた。すこし遠いが中央線小金井駅から五分位の前原という所に、栗林のなかの家をこわした跡地が一七〇坪で千円だというのがあった。環境がよいのが何より気に入った。家は周囲から全部に日が当たるように自分で設計した。玄関なんて無用な封建の遺風はやめである。ドアを開け、はきものを脱ぐと、すぐが廊下の終りで、左のふすまをあけると六畳、その奥が八畳、右に入ると三畳間、その次に台所そして風呂場となる。便所は北と東の隅にあり、外からも座敷からも入れた。よい水が出る井戸が前にあって、地境いには杉の大木が十数本立っており、梅の老木や竹林もあった。妻の兄が大工だったので、古材木を買ったりして、それだけの家を千円で建ててくれた。ようやく竣工して、移ったのは二九年四月だった。

この家はすこぶる機能的に、住みやすくできていることが、山鹿の自慢であった。そして彼は広い庭先の空地を利用してあひるを飼い、チャボにその卵を抱かせるという金もうけに失敗したり、茶の木を植えたり、野草を採集して薬草園を作ったりした。そうしてさまざまなかたちで自然との生活を享受したのであった。その三七歳から四七歳までの一一年間は山鹿にとって今迄で一番平穏な時期であった。それはまた家族たちにとっても、ことあるごとに懐しく思いださせる第二の故郷となったのである。

紀北長島の生産学園

一九二九年（昭和四年）一〇月、アドバタイザー社が失火で焼失し、山鹿はたちまち失職した。ちょ

うど日本中が深刻な不況で、倒産があちこちに起こり、農村では子女の身売りが続き、失業者が町々にあふれていた時代である。

その年の正月は、印刷屋の外交でようやくしのいだが、それっきり山鹿の働き口はどこにもなかった。そこへ、小坂狷二が耳よりの話を持ってきた。三重県長島に、今度国際高等学校紀北実践女学校生産学園というのが出来た。そこのエス語教師にゆかぬかというのである。設立者の小林留木校長に会ってみると、大本教、人の道、希望社などに出入りする精神主義の教育家であった。多年にわたり労学一致の生産学園をつくるべく奔走し、今度紀北長島村の有力者を抱きこんで土地の提供をうけ、資金を出させてやっと開校した。ところが適当な教師がいなくて困っているので、ぜひ一家そろって住みついて欲しい……という話である。エスペラント語を教えるだけでなく、印刷部も作る計画だから山鹿ならうってつけといえた。山鹿は、運動を続けるということで、東京在住に未練はあったが、また一方、そのころの自連分裂のいざこざに巻き込まれるのに、ほとほといや気がさしていた。そこで小金井の家は一時、島津末二郎に住んでもらい、新学期のはじまる四月早々、一家揃って長島へ移っていった。

女学校は女生徒が五〇人位いて、小林校長の手ほどきでエス語はとにかく少しはやれるようになっていた。そこへ新しく募集した男子生徒が、新学期から一〇人加わった。印刷所は京都の機械屋から八頁手まわしの古印刷機一台を買い、もと工場だったアバラ屋に手を入れ、大工経験のある男子生徒の手でロールと活字棚を苦心のすえに作らせると、やっと生産学園の外観は整った。印刷実習はこれからである。ところが、小林校長は実習をはじめると間もなく新聞を出すといい、原稿をどしどし書

いて渡してくる。手まわしのロールを、素人の生徒が使って刷れるはずがない。自然、山鹿が機械を動かすことになり、実習どころの騒ぎではなくなった。それに校長は、村のボス連に接近して金を少しは引き出したものの、自分の持ち金は一文もない苦しいやりくり算段のため、生徒は朝から強制労働で働らきづめとなり、夜間にほんの形だけ、エス語を教えるといった様子となった。

――男の先生が二、三人来たが、呆れてすぐやめてしまった。残っているのは私と女子を教えている校長の妻君だけである。こうしてすぐ夏休みになった。校長が金策のために旅に出たある日、「三重県庁の教育課のものだが」と役人がやってきた。「校長はいない」と言うと、「高等学校と称する以上、高等学校令によらねばならない。この学校は違法である。それに君は教師の資格を持っていないのではないか。すぐ閉校せよ」と言って帰っていった。

たちまち生徒達からも不満と動揺が起きてきた。私は校長に電報を打って呼びもどす一方、すぐにも自分の身のふり方を考えねばならなくなった。そしてとりあえず京都へと出かけた。

バーテンダーになる

――京都のアナキストシンパの続木君は、進々堂という大きなパン屋をやっていた。夫婦とも同志社大学の出で、フランス語を学んでパリへ行き、パン工場で実習して帰ってきたところだった。そしてパン屋の隣りに、純フランス風のカフェーを開く準備をしていた。しろうと風のしゃれた店をやりたいとのことで、私に一家住み込みで店を引き受けぬかということになった。店は龍安寺の近くの最適の場所である。紀北から京都へ移った私は、こうして一転にわか仕込みのバー

テンダーに成りすました。パンとコーヒーの食べ放題が店の呼びものである。進々堂特製のパンは、勝手にお客に選ばせる。エチオピアとブラジルから大袋で輸入した生のコーヒー豆を、焙煎機で焙る。その挽きたてを、一ポンドずつメンネルの三角袋で漉して、アーンという陶器壷をガスで温める。私はコックから出る保温器の前に、白ワイシャツ一枚の威勢のいい姿で、ボーイ三人とレジスターの女一人を使って北白川の大学裏通りに開店した。

なにしろコーヒーは、一合半も入る大コップ。砂糖と牛乳は使い放題。パンはパリやウィーンにもまけない日本一。それが一杯たった五銭だから、お昼には大学生で満員で、目が回るようだった。ところが、私は毎日味見のコーヒーを何杯となく飲むので、胃がすっかりやられてしまった。考えてみると、その半年間に二万杯以上のコーヒーをたて、その味見をやっていたわけである。

店もだんだん軌道にのり、形がついてきた頃から、進々堂はだんだん資本家根性がちらほらするようになった。山鹿も朝から晩まで店にいて、自分のことで外出ひとつできないこのバーテン商売を何時までもやる気はなかった。東京には家もあるし、印刷工の職場も多い。それに同志たちとやるべき仕事もある、そんな考えから内々で伝手を求めて、東京での働き口を捜していた。

かつてアドバタイザー社が火災で倒れた後、ひょっとしてオフセットで英文新聞が出せないのかと考えて、単式印刷へいったことがあった。そのとき知り合いになった単式の和田社長との縁で、芝浦工場の営業部に欠員があるとの知らせが来た。いまが潮時と思った山鹿は、半年間の進々堂生活をやめ、再び東京へ帰ることにした。

チブスと幻想

——単式印刷は、芝浦の線路脇の一画に建っていた。事務所には、経営者の専務と支配人がいるだけで、注文主は出版屋ばかり。百科辞典の平凡社が最大の得意先であった。そこには同志の近藤憲二、植村諦などが勤めていて、連絡に好都合だった。ただ小金井からの通勤は、毎日国電で往復四時間、朝六時に出かけて八時の定刻にやっと間にあい、夜はもう真っ暗になってから帰るのだから、腹もへるし体もくたくたになった。

三三年八月、帰路で空腹のあまり焼鳥を食べた。家へ着くころから頭がガンガン痛む。下痢はする。ところが医者がヤブだったのか、二週間も原因がわからなかった。腸チブスとわかって、多摩の隔離病院へ送られた時は、もう手遅れで腸出血があらわれていた。意識ははっきりしていたのだが、幻覚で現実と空想の区別がつかなくなっていた。隣室に石川さんが寝ているかと思うと、エスペランチストの医者がロンドンから飛行機に緑星旗をたてて見舞いに来てくれ、エス語で話していたり、なかなか面白い経験だった。四〇数日間熱にせめられ、一巻の終りが迫ったらしかったが、どうにか救われた。

久しぶりに会社へでると、私のとばっちりでどこもかしこも消毒されたり検便を受けたりで、大騒ぎだったとのことだった。そして再び、私は平常にもどって、毎日四時間の途を通勤しはじめた。

SATとTLES

日本のエスペラント運動が、国際中立主義という名目のもとに政治や社会問題から全く眼をそむけて、インテリや学生層の間でただ言語学的な興味の分野での普及に留まっていた大勢に対し、労働者の団結と国際連帯の武器としての新しい方向を打ちだしたのは、大阪の福田国太郎、相坂佶らであった。

彼らは一九二〇年(大正九年)九月(山鹿が丁度京都監獄で受刑中の頃である)全文エス文の文芸誌"Verda Utpio"(みどりのユートピア)を発行し、我国で始めて労働者を対象とする、講習会を開きはじめた。また折しも、欧州大戦後のヨーロッパの同志によって生まれた労働者エスペラント運動は、E・ランティの「中立主義を捨てよ」の宣言となり、一九二一年にはその国際組織である全世界無国民性協会(SAT)が設立された。福田はいち早くこのSAT創立に参加すると共に、日本エスペラント学会(JEI)から分離し、『みどりのユートピア』の読者などに呼びかけると、その日本支部を作って活動を開始した。

SATは、その名称が何よりもその傾向を示すように、アナキスト的な立場をもつランティの主張を主流としながら、エスペラントを社会の進歩と変革に役立たせようとする、あらゆる種類の社会主義者、労働者を集めたものであった。さらに一九二五年には、SATのなかにあらわれてきたソ連派の策謀に対抗するため、アナキストエスペラントグループは独自活動を進めるために全世界無国家主義者エスペラント連盟(TLES)を発足させた。そしてTLESは、異なった言語を使用している各

国の無政府主義者とその共働団体の連絡、提携の役割を受け持って、世界の無政府主義運動のために働くことを目的の第一に掲げていた。山鹿は、この発足に直ちに呼応し、第四次『労働運動』八号に、「自由主義エスペランチストに檄す」という記事を書き、TLESの日本における連絡事務者となったのであった。

TLESは、その年八月から機関紙『自由労働者』(LL)を発行した。始めパリで編集していたが、のち編集、印刷ともにドイツに移り、老建築工ライヘルトが担当するようになった。山鹿は、彼と文通上の親しい友人であり、LLの読者獲得に積極的に活動した。その結果、日本国内のLL購読者は、自連系労働者の中に拡がって三百数十人となったが、それは実質的な数としてもっとも多いとして各国の注目を集めるほどであった。TLESはもともと労働者とその組織に強く結びついて発足したその性質上、アナルコサンジカリズムの伝統を継ぐ国際労働者協会のニュースを多く扱い、LLはそのエス文海外通信連絡版の役割を果たすものであった。

ところが、一九二七年(昭和二年)夏以来、日本のアナキズム運動は、いわゆる黒連のサンジカリズムはアナキズムに非ずとする純正アナキズムの主張によって分裂が起こり、全国自連も分裂し、サンジカリストの追い出しが始まっていた。そのような状況に対して、国際労働者協会は書記長スーシーの名のもとに、第二回全国自連大会に祝辞を送ったが、その祝辞で「同志諸君、我等は日本の自由労働運動内部において今日、純正アナキストと純正サンジカリスト間に論争あることを仄聞した。我らの意見を述べるならば、かかる問題についての討論はまさにその時を得ているものでない。それは全く理論的性質を帯びたものである」として、アルゼンチン、スペイン、南米の運動について述べた後、「以

上の理由により、我々は全世界のサンジカリストの名において大会の成功を熱望し、諸君が効果なき論争に諸君の精力を浪費することなく……」と書いてきたのである。

これに対して黒連は、機関紙『黒色青年』一六号で激しく駁論し、自連にもまたそれに同調する傾向がでてきた。そしてTLESもまた、国際労働者協会＝サンジカリスト派のものとみなされ、排撃されるようになった。そして、「日本におけるアナキズム運動内の過去数年にわたるエスペラント語普及運動は、甚だ目覚ましいものがある。TLESの機関誌LLの支持者は、世界を通じて最も実質的に大なるものがあった。しかるにTLES内部の一部サンジカリストらは、LL誌を自己の機関誌にせんとする策謀を漸次露骨にしてきたため、当然我々エスペランチストは、彼らと訣別せねばならなくなった……」（二九年一〇月『自由連合』四〇号）として、その年一一月より全面エス文の『ラ・アナルキスト』を自由連合を発行所にして刊行し、TLESとは独自の路線をとり始めたのであった。それはようやく盛んになってきた共産党系のプロ・エス運動との対抗の意味をも加えて、当時のアナキズム運動の状況を、そのままエスペラント運動に反映するものであったといえる。

この『ラ・アナルキスト』の編集発行は、山鹿の自連講習会で育った島津や安井たちが主力で、山鹿はまもなく紀伊そして京都へと去ったので、やや遠ざかった立場に置かれることになった。

それから一年、東京へ舞い戻った山鹿は、エスペラントの会合によく顔を出すようになった。

――その頃私はアルジェンタ・クンシードと名づけたエスペラントの集まりに出席していた。始め神田小川町のコーヒー店で集まったカンダ・クンシードは、コーヒー一杯でみんなが遠慮なくエス語でわめきたてるのですぐ断わられた。さらにサラリーマン森永で断わられ、須田町の広瀬

銅像前の洋食屋でも断わられた。その後銀座で集まるようになったのでアルジェンタ（銀の）クンシード（集会）と名づけられたが、ここでもアルジェンタ――銀鈴をふるような、ではなくてどら声でエスペラントをわめくのだから長続きしなかった。その上、ナチスかぶれの藤沢らがやって来て、日独伊三国同盟礼賛をやるので、真面目な連中はだんだん近づかなくなってしまった。

私もやめて、帰り道の吉祥寺にあったムサシノ・クンシードに出ることにした。ムサシノにはアナ系の者がだんだん集まり、和田義雄（ラジオ技術者で有能だったが若死にした）安井義雄（楽符謄写屋）木股（写真師）島津徳三郎らが中心メンバーだった。またそこでは、中国から来た葉君健（中国農民の生活を描写した小説『わすれられた人々』の著者）や、ドイツ人のエスペランチスト夫婦を歓迎したことがあった。

ランティの来日

一九三七年（昭和一二年）四月、スペイン革命たけなわのころ、SAT（全世界無国民性協会）創立者のE・ランティが突然前触れもなく来日した。旅券には彼の本名E・アダムとあったので、横浜税関は気づかずに入国させてしまったらしい。東京へ来るとお茶の水のアパートに入り、エスペラント学会を訪ねたが、そこの誰かが警視庁に知らせたらしく、たちまち尾行がつくことになった。

ランティは、エスペラント運動史上、逸することのできない重要な業績を残した人物である。彼はパリの職工学校の数学教師で、アナキストであり、また何より反戦主義者であった。第一次大戦中、戦闘行為を忌避して病院に勤めていたときエスペラントに触れ、そしてエスペラントが国家間の憎悪

を超えて、交戦国の国民と兵士をエスペランチストとして結びつける姿をみた。それ以後、彼はエスペラントの普及を知識人や学者の中に置くのでなく、何よりも労働者のものにしなければならぬことを強く主張するようになった。一九二一年にランティは、今までの運動がブルジョア中立主義であることを批判し、SATを組織すると同時に目覚ましく活動し始めた。以来一五年間SAT運動の中心として多数の論文を発表し、その労働者にもよくわかるエス文は、簡潔で風格のある名文として定評があった。しかしその思想は、当然、共産党の影響下にある人々と対立するものであり、反幹部派とよばれるボル派の人々の策謀で本部を追い出されることになった。しかも警察にまで追われる身となって亡命先を求め、日本へ来たのであった。

——私とランティは、一〇年も前から文通していた。ランティが会いたいと言っていると聞いて電話をかけると、ランティは私の注意通り尾行をまいて、車で単式印刷へやってきた。会ってみると、前に写真で見た彼とは全然違って、白髪の老人だった。

一九三四年にSATの出版局から出された『プレーナ・ボルターロ』(エス・エス大辞典)は、それ以後エスペランチストなら、かならず座右にしなければならないものとされるようになったほど重宝な、すばらしい出版であった。しかしそれはあまりにも大冊で持ち歩くのに不便というううらみがあり、私は、その辞典を半分の判に縮刷して刊行する、という考えをかねがねもっていた。それを単式印刷の特許技術でやれば至極容易で、しかもそれほど高くはならぬ見込みであったので、私はさっそくランティにその話をした。単式印刷の工程を見学させ、見本をオフセット刷りにしてみせた。皮表紙をつけて一冊八〇銭で作れる見積りを出すと、ランティは大変乗り気にな

った。すぐパリのSAT出版局へ相談して、実行させると言った。(ところがその直後、フランの為替相場が大暴落したので、当分不可能になった。)

ランティは、その後石川三四郎にも出会った。そして「以前も今も私は無政府主義を支持している。が、クロポトキンがドイツを憎むあまり参戦支持をして以来、現在はむしろセンナッツイストである」といった。また彼は仏教に興味をもっていて、日本へ来たのもそれに魅かれてであった。そして金沢の仏教エスペランチスト竹内藤吉をたよって山中温泉に住んだが、日本の警察は彼の活動を許さなかった。ランティはその後日本を去って、ニュジーランドへ行き、さらにメキシコに渡った。そこでピストルで自殺して、波瀾の生涯を自ら終えたのであった。

スペイン革命

一九三六年(昭和一一年)七月、日本が軍国主義一色となり、あらゆる運動がしだいに沈滞化していく中で、突然血を躍らすようなニュースが飛びこんできた。スペイン革命がはじまったのである。七月一八日に、北アフリカのモロッコに駐屯していた将軍フランコは、スペイン共和政府の弱体に乗じて、モロッコで叛旗をあげた。ジブラルタル海峡を渡ってアンダルシアに侵攻し、セヴィラ、メリラ市に殺到した。フランコは、アフリカから連れてきた剽悍なムーア人を煽動し、略奪、強姦を公許して残忍を極めつつ、破竹の勢いであった。共和政府部内にも軍部やカトリックなどフランコと呼応する動きが起こり、スペインはまさにファシズムの土足に踏みにじられんばかりとなった。

当時スペインにおける最大の労働組織CNT(全国労働総連合・アナルコサンジカリスト系組合)とFA

Ｉ（イベリア半島アナキスト連盟・地下組織）は、まずバルセロナでフランコに呼応しようとする軍隊の機先を制した。武器引き渡しを拒む兵営を包囲して攻撃し、監獄を破壊して政治犯を釈放し、武装闘争に立ち上がった。ついで、共和国政府の妥協申し入れと援助要請を受け入れて、モントセーニ、ヴィウァンコス他が入閣、対フランコ共同戦線を張ることになった。

――スペインのＣＮＴ・ＦＡＩから私のもとへ送られてきたポスターは、全判オフセットの多色刷りで、いずれも知名の画家が書いた素晴しいものであった。「アル中防止」とか、脂粉の女たちが哀しげな風情でならんでいる「売春防止」のポスターもあった。また一五種類一組の反戦シールには、その一枚一枚に一五カ国の国字で「エスペラントを学べ」とそれぞれ書かれていた。

山鹿は、次々送られてくるニュースと一緒に届けられるポスターとシールを活用して、ひそかに義金募集をやり始めた。

――石川さんが秘密集会を作ってくれたことがあった。スペイン義金を募集したところ、財布をはたいて、真っ先に出してくれたのは水沼辰さんだった。それにならって、われもわれもと出してくれた。

しかしそのころの日本は、フランコに加担するドイツ、イタリーとの同盟に加わり、スペイン革命に協力するものは通敵行為として直ちに捕まる恐れもあった。

――もちろん義金を集めても送ることは許されなかった。私は普通便の手紙に紙幣を同封すれば、万一途中で開封されない限りパリへは送れることを発見した。パリにはＣＮＴ・ＦＡＩが対外連絡事務所を開設していた。特高のうすのろ共には、そんな経路は思いもよらなかったらしく、そ

れは見事に成功した。

スペイン革命がはじまって以来、東京のスペイン大使館は門を閉ざし、保守系の大使は帰国してしまい、館員だけがもとのままだった。人民戦線政府は、大阪外語の教授だったアルバレスを新たに大使に任命した。しかしアルバレスはホテルに滞在して、大使館へ行こうとしない。私は、スペイン大使館が治外法権であるのに眼をつけた。それを利用して、ＣＮＴ・ＦＡＩに直接連絡をとったり、その他いろんな便宜を生み出したいと考えた。アルバレスに面会して、大使館へ入るようにと勧めたが、まだ前の館員が居すわっているからと動かない。「我々アナキストが協力する。いざというときは必ず護る」と言ったが、「いや、ホテルにいても、敵に脅威を与えているのだから……」と応じようとしなかった。彼の妻君は、奈良女高師出の日本人、彼は歴史学者でなかなかの日本通だったが、所詮学者先生であった。革命が不利になってくると、早々に逃げ出して、また外語の先生をやりはじめた。

さて、アナキストが共和国側の大きな勢力となって、スペインの全小学校がエスペラントを正課として採用、授業が始まったというニュースは、山鹿をことさら喜ばせた。ＣＮＴ・ＦＡＩと国際労働者協会は、エス文の『インフォルマ・ブルテーノ』を発行し始めた。これはのち『ラ・リベルツァーナ・シンテーゾ』と改題され、ＣＮＴ・ＦＡＩのみによって続けられた。

また戦線にはアナルキスタ・ロートというエスペランチストばかりの中隊もでき、外人部隊として勇名を馳せた。山鹿は、すぐパリ事務所を経由してその部隊へ手紙を送り、通信をはじめた。向うからの返信は、ことごとに火薬の足りないことを、繰り返し訴えていた。手紙は、「フランコ側は、独

伊両国の援助でふんだんにもっている。服装も装備もよい。我々はそれを奪い取って使う。ないときは、黒色火薬をも使用する。しかしライフル線条入り銃には、ガスが残って銃身が破裂することがある。もし火薬を送ることができるなら、必ず白色無煙火薬を送ってくれ」と書いてくる。そんな手紙をみると、山鹿は義勇兵になって、戦場へ飛び込みたい衝動に駆られるのであった。しかし渡航する方法がない。それで、

——私はパリのセンターへ申し入れを送った。「日本にも、同じように革命のために命を惜しまぬ仲間が沢山いる。スペインの船を寄港させるか、大使館で便宜をはかってほしい。外人部隊で働こうというものは、数十人いる」と。しかしその返事は「志は有難い、だが、義勇兵を志願する人々はたくさんいるが、その人たちが手にする武器がない。何よりも武器が欲しい。武器を買う金がほしい。義金を集めるために闘ってくれ」という内容であった。そしてついに、革命派は敗れたのである。

世界語『老子』

山鹿が京都で入獄した時手にして以来、『老子』は長い間、彼の愛読書であった。無政府主義が、一九世紀になって初めて西洋で生まれたイズムなのではなく、二四〇〇年前の老子の説くところによっても、それは古今東西を貫ぬく真理であり、万人の道であることを、彼は一層確信することができたのである。そしてこれを、何とか欧米の同志にも紹介したい、と考えるようになっていた。

しかし、もし翻訳をするとしたら、一字一句を曖昧なままにすることは出来ず、といって読めば読

むほどいろいろと疑問が出てきて、欧米人に理解させるのはとても容易ではない、と半ばあきらめていたのであった。ところがある時、古本屋をのぞいていて、神戸の井上秀天という人の『老子の新研究』という本を入手した。この著者は『碧巌録』を英訳したこともあるらしく、その解釈は至極明快で、しかも山鹿の疑問とするところをぴったりと判断していた。そこで、山鹿は神戸の熊野町の谷間のようなその家を訪ねたり、通信をやりとりして、教えを乞うことになった。

その頃、小金井から芝浦までの毎日の通勤の往復四時間は、山鹿にとって、ある意味では「無用の用」ともいうべき、さまざまな思索につかえる時間であった。そしてこの毎日の車中での四時間を使って、山鹿は何年がかりでも『老子』のエス訳をやりとげようと考え立った。

——もともと『老子』は、紀元前四八〇年、今から二四〇〇年前に書かれた昔のもの、漢字にして五三二八字、八一章、唯一の老子の著作で、おそらく竹を割って皮で綴った巻物に、漆で書かれたのだろう。老子の古文は、昔から解釈が色々あって、本場の中国でも異論百出で、真の意味を取れない個所が多い。第一章の「道可道非常道」ひとつをとっても、一般には「道の道とすべきは常の道に非ず」と読まれているが、道は動詞の場合、謂うとか云うと読むべきで、「道の云うべきは、常の道に非ず」と、最上の強い否定によってこそ、始めて老子の真意に達するのである。

山鹿は熟読すると、その度にまた文章を改めたくなり三度もエス訳を書き改めた。そしてようやく完全に訳し終ったのが三年あまり後の一九三九年初めであった。すぐ本にして出版するあてがなかったので、例の獄中で完成した山鹿流の筆記体で清書したものを写真にとり、単式印刷のオフセットで

百部作りあげた。それを海外の知己同志へ送ったのは、その年の三月のことであった。

南国への脱出

一九三九年（昭和一四年）のある日、丸の内の工業クラブで印刷業者の会合があった。欠席の重役の代理で、山鹿がそれに出席したところ、会合の終りに軍人が「時局講演」をやった。そして「ここだけでの話だが……」と断わりつつ、軍部が東南アジア侵略計画を着々と進めている様子を得意気に話した。

国内では、すでに反動の嵐が荒れ狂っていた。前々年自連は消滅し、東印も解散して、アナ系の運動はすべて表面から姿を消していた。昨日同志であったものが、にわかに転向して天皇制国家を讃美し始める例も、珍しいことではなかった。山鹿はこのまま戦争へと、急坂をころがるように進んでいく行末を想像して、慄然とした。はやくも軍部は仮面を脱ぎ始めた。そして国民を支配し畏服させる日がくるのは、将校の話で火をみるより明らかであった。近藤憲二にその話をすると、「まさかいくら軍人が馬鹿でも、米英とやる気はあるまい」と言う。しかし、もし米英相手の戦争をやれば、必ず敗けるという見透しでは一致した。万が一でも東南アジア侵略が事実となれば、米英が黙っている筈がなかったし、戦争になって島国が戦場と化したら、皆殺しの恐れもある。第一、食べ物がなくなるだろう。山鹿は、食べるには事欠かない熱帯の豊かな果実を思った。それはまた多年の山鹿の夢でもあった。

小池英三や望月百合子、古川時雄らは満州へ移住すると言っていた。しかし山鹿は中国の同志から

の便りで、日本の資本家と軍部がどんな悪どいことを中国でやっているか、その大体の形勢はわかっていた。それに昔、大連に住んだ時の極寒の気候を思うと、何の希望も持てなかったのである。山鹿はフィリッピンへ渡りたいと思った。そこには古くからのエスペラントの知己がいるし、また間もなく独立する保証をアメリカから与えられていた。内地を脱出して、日本帝国主義が葬り去られる日を待つのに、絶好の地のように思われた。といって簡単に行く方法はなかったが、ともかくちょっとでも近づけば、また渡れる方法があるかも知れないということで、まず台湾へ移住する方針をたてた。妻のミカは乗り気でなかったが、二人の子供らは南国が珍しく、大喜びであった。

内幸町の台湾総督府出張所へ行って尋ねてみると、役人が「君はいま、東京で生活できていますか」と言う。「もちろん、できている」と答えると、「それなら大丈夫、台湾も日本と同じことだ」と言うので、大いに気を強くした。台北には同志の連温郷もいるし、高田公三や浅井恵倫博士も行っている。子供らはこのような日に備えて、アイノは洋裁学校で洋裁を、大次郎は写真屋の手伝いをしてスナップ写真位撮れるようになっていた。山鹿は小型印刷機をもって行って、名刺印刷でもやるという生活設計である。単式印刷の重役会議に、台湾進出を献策してみたが、取り上げられなかったので、山鹿は医者から「神経衰弱で転地療養の必要あり」という診断書をとって、休職にしてもらった。小金井の家は新聞広告を出して、二千円で売りとばした。

家財一式を三日がかりで自分で荷造りをし、霊巌島の船会社から台湾の最南端の高雄港留で送り出した。もちろん高雄に何らかのあてがあるわけではなかった。

台湾へむかう途中、京都へ立ちよると、兄の清華は「お前の年位には、みんな外国から帰ってくる

ものだ」とあきれたが、「どうせ止めても、止まらぬだろう」と言う。こうして一九三九年九月、親子四人めいめいトランク一つをもって、神戸港から基隆までの船旅に出発した。